

行為の反省過程としての歴史学習

— 高校地理歴史科世界史B小单元「北米植民地における魔女狩りと民衆意識」の場合 —

The Organization of History Lessons as the Process of Reflective Monitoring of the Behavior: In the Case of the Unit 'Witch-hunting case and the People's Consciousness in the Colonial New England' in the Senior High School Subject "World History (B)"

梅 津 正 美
(鳴門教育大学)

平 井 英 徳
(熊本県立松島商業高等学校)

I 問題意識—なぜ「行為の反省」を原理とする歴史学習が必要か—

筆者は、学校教育における歴史学習を、「歴史を通じた現在理解」を意義とする「社会科歴史学習」として性格づけたい。「歴史を通じた現在理解」は、3つの内実をもつ。第1に、社会構造の理解、第2に、社会形成の主体としての人間理解、第3に、社会問題の理解、である。しかし一方で、歴史授業の構成や実践レベルでの子どもの認識形成の実際は、研究者なり実践者が保持している「社会と人間の関係の捉え方とその分かり方の論理」、すなわち社会認識論により異なっていよう。

筆者は、これまでに有力な「社会科歴史学習」論を、内在する社会認識論に着目して、大きく2つの類型において整理している。

第1の類型は、「行為の解釈」を原理とする歴史学習論である。この類型では、「社会」と「個人」の関係を、「個々人の意図的・目的的な行為により社会が構成される」と考える。こうした社会認識論を基盤に、一般に、学習内容は、歴史を生きる人間の目的追及活動(行為)と社会的意味を軸に構成され、学習過程・方法には、行為の追体験と意味連関の解釈が採用される。そして、学習を通じて育成がめざされる人間像は、社会があらかじめ保持している「価値(公共善)」を受容し、それに基づいて行為できる「社会化された生活者」である。「小学校学習指導要領・社会」に依拠した歴史学習や安井俊夫氏の中学校歴史教育実践¹⁾が、この型の典型例である。

第2の類型は、「社会(構造)の分析」を原理とする歴史学習論である。この類型では、「社会」と「個人」の関係を、「社会は、超個人的なシステムであり、個人の諸行為に影響し、これを制御している」と考える。こうした社会認識論を基盤に、学習内容は、特定の時空間にある社会構造を説明する理論(仮説)を軸に構成され、学習過程・方法には、事象の分析が採用される。そして、学習を通じてめざされる人間像は、科学的社会(歴史)認識能力と探求技能を保持した「合理的・批判的な社会学者」である。森分孝治氏の「概念探求学習論」²⁾や原田智仁氏の「理論批判学習」³⁾が、この型の典型例である。

一般に、両類型は、二元論的・相互批判的に把握されてきた。第1の類型に対しては、「授業者が選択した歴史上の人物を通じて一元的価値観を注入している」、「子どもに社会構造の把握が十分にできていない」などの批判がなされてきたし、その裏返しとして第2の類型に対しては、「科学の論理が先行して、子どもの認識の論理が軽視されている」、「個人に対する社会構造の拘束力が強調されるため、子どもに決定論的歴史認識を形成しやすい」といった批判がなされてきた。しかし一方で、両類型は、前者が「行為にねざす社会的価値」、後者が「社会構造」と社会認識の視点は異にするが、いずれも「安定的な社会の存在」を前提に成立する学習論として共通項を保持しているのである。

これに対して、筆者は、「社会」(特に「現代社

会)は、「多元的な価値基準の存在」を前提に、「状況に応じてゆらぐ社会」として捉えている。私たち「生活者」は、政治的・経済的・社会的・文化的にあらゆる営みをする行為者⁴⁾として社会に存在している。しかし、その行為の決定は、必ずしも認識の合理性や一貫した価値判断によらず、自己の時々の生活目標や問題関心と社会が自己に課してくる諸条件に照らして、関与する社会を選択したり、比重を変えたりしながら、状況に応じて為していよう。ここに言う「社会」と「個人」の関係性の捉え方は、「社会は個人の行為や価値観を規制するが、その一方で、個人の行為に選択・利用され、変化していく」という相互作用的な関係性の見方に立っている。⁵⁾

「ゆらぐ社会」における行為の決定には、自己の掲げる行為目標への不安や他者の行為とのぶつかり合いによって常に葛藤が伴うため、こうした不安や葛藤から逃避しようとする者は、小さな自己に対して大きな社会が提示する一元的な価値基準に自己の行為を準拠させていくか、個々の行為を状況の中で合理化していくことに安住していくが、そのことによって、自己を規制する社会構造や社会的価値基準に対する反省性が次第に失われていっているのが現状ではなかろうか。

こうした社会観のもと、筆者は、社会科授業を通じて育成したい人間像に、日常生活において状況の中で選択した自己の行為を常にチェックし、再方向づけしていこうとする「行為のモニタリング能力」(換言すれば、「行為のメタ認知能力」)をもった「反省的な生活者」モデルが必要であると考え。「反省的な生活者」を育成するための学習原理が「行為の反省」である。この学習原理は、ミクロな行為とマクロな社会を相互作用関係にあるものとして捉える社会認識論を基盤にすることから、従来二元論的に捉えられてきた「行為の解釈」と「社会の分析」を授業レベルで有効に結び付ける視座を提供しよう。またそれは、生活者の行為に影響する社会構造や社会的価値が歴史にねざして形成されてきていることを考慮すれば、特に「社会科歴史学習」において有効であろう。

以上の問題意識に基づき、本小論は、「行為の反省過程としての歴史学習」の授業構成論を明示

し、それに基づく教材開発例を高等学校世界史学習をフィールドに提示することを目的とする。⁶⁾

II 授業構成論

1. 内容構成論

内容構成のための基本的な考察課題は、特定の時代における「生活者の行為」と「社会」の「相互作用関係」の具体的な構成の仕方にある。これに対する筆者の概念操作は、次の通りである。

特定の時代における「生活者の行為と意識のあり様」を、「社会構造」と「文化」との「相互作用関係」として構成する。「社会構造」は、社会集団・社会階層、経済組織、政治制度、法律体系、科学技術などを要素とするシステム化された制度・装置群とそれらの相互連関のパターンである。「文化」とは、一定の人々の経験知として共有された価値観・規範、基層信仰、慣習などを要素とする特定の社会の独自の性格を形成する領域である。また、「相互作用関係」の具体的な構成は、次のようである。まず、歴史主体である「生活者」を、多様な人種・民族集団や、女性と男性、若年者と高齢者、中産層と貧困層、エリート層とノン・エリート層など多様な社会集団・社会階層に属する人間から選択し構成する。歴史内容は、多様な生活者が「社会構造」と「文化」が生み出す諸条件の規定性や統制のもとで、それらを選択的に利用することによって、状況に応じて生み出した複数の異なる行為の形態とその意味を明らかにし、さらに複数存在する行為の葛藤・せめぎあいを通じて、生活者を取り巻く「社会構造」や「文化」がどのように安定化したり、あるいは逆に流動化したのかを把握していけるよう構成する。

内容構成の基本枠組みとなる「生活者の行為」と「社会」との関係性をモデル化して示したものが図1である。

学習主題の選択は、主題がこうした内容構成の基本枠組みを満たすとともに、現代社会においても生活者の行為と価値観の葛藤・対立にねざして類似の問題状況を提起しており、子どもがそうした問題状況と対峙することで自分の行為基準を揺さぶられ、問題解決への指向性を高めていけるものであることを基準に行うこととする。

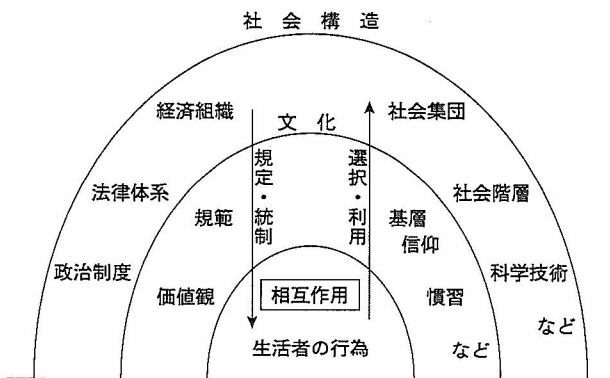


図1. 「生活者の行為」と「社会」の関係モデル

2. 学習過程論

学習過程は、基本的には次の7段階をふむものとする。①特定の時代を生きた多様な生活者の行為内容、およびその行為の基盤となる意識や価値観を体験的に解釈する。②個別・複数の行為内容と意識・価値観を比較・対照する。③生活者を取り巻く「社会構造」と「文化」の連関パターンを分析する。④個別・複数の行為内容を、当該時代の「社会構造」と「文化」の連関パターンに位置付け、行為を生み出した諸条件を解説する。⑤学習者自身の当該時代の生活者の行為に対する評価内容と評価基準を構成する。⑥学習者自身の評価内容と評価基準を他の学習者の見解とのせめぎあいを通じて批判的に再構成する。⑦現在みられる行為と社会の関係性をめぐる類似の諸問題の解決に向けて必要な新たな価値基準を選択的に導く。この7段階は、Ⅰ：「歴史における行為・社会構造・文化の相互作用関係の事実認識過程」(①②③④)→Ⅱ：「学習者自身による歴史的行為の評価基準の再構成の過程」(⑤⑥)→Ⅲ：「現在を生きる生活者としての自己の行為の再方向づけの過程」(⑦)へと展開する「行為の反省過程」としての歴史学習過程である。

3. 学習方法論

学習過程Ⅰの学習方法は「探究法」である。その適用過程は、生活者の行為や意識のあり様を彼らの手紙・手記・物語あるいは日常物質資料などを通じて帰納的に叙述する過程から、そのような行為が展開した原因・根拠を問う発問と資料を用意し、その回答を「社会構造」と「文化」の特質から子どもに判断させ引き出していく過程へと展

開していくことになる。その場合に、学習過程Ⅰを構成する学習段階①②は特に、生活者の状況における行為とその背後にある意識を子どもが共感的に理解していく必要がある。そのための具体的な学習方法には、「行為の物語の読み取り」が通常よく用いられるが、さらに「ロールプレイ」「シミュレーション」といった体験的・活動的な方法の選択も有効であろう。

学習過程Ⅱ・Ⅲの学習方法は「討論」である。討論は、歴史的過去および現在の行為と問題と思われる事態の評価基準を互いに表出し、意見のせめぎあいを通じて子ども自身が行為の評価基準を再構成していくのに有効な方法であろう。

Ⅲ 授業構成の実際

上述の授業構成論に基づく教材開発例として、高校地理歴史科世界史B小単元「北米植民地における魔女狩りと民衆意識」を以下に提示する。

1. 授業計画

(1) 小単元の学習目標

知識目標

次の知識内容を理解する。

「北米のイギリス植民地において、ヨーロッパよりも遅く魔女狩りが広がった背景には、対フランス戦争の激化やインディアンの襲撃、疫病流行などの諸事件、植民地の社会制度や社会集団関係、それらに起因する不安定な民衆意識があった。そのなかで一般の民衆は、自らの判断に疑問を持ちながらも、魔女狩りを許容していった。」

能力目標

魔女狩りと当時の一般民衆との関わりを現代に投影することを通じて、自己の日常的な行為と社会との関わり方を反省的に吟味できる。そのことによって現在の社会の中に問題点を発見し、克服の方策を自分なりに展望できる。

(2) 小単元の計画(4時間構成)

パートⅠ：ニューイングランド植民地の魔女狩り事件と社会(2時間)

パートⅡ：魔女狩りと民衆の関わり(1時間)

パートⅢ：現代の魔女狩りと私たち(1時間)

(3) 大単元における位置

本小単元は、大単元「アメリカ独立革命への道」

- (7時間構成)に、以下の通り位置づけられる。
- ① 北米の植民地化と13植民地の成立 (1時間)
 - ② ニューイングランド植民地の魔女狩り事件と社会 (2時間)
 - ③ 魔女狩りと民衆の関わり (1時間)

- ④ 魔女狩り事件と私たち (1時間)
- ⑤ アメリカ植民地の反抗 (1時間)
- ⑥ アメリカ独立革命 (1時間)

(4) 小単元の展開過程

「教授計画書(試案)」として、以下に示す。

<第1時>

学習パート	学習過程	教師の指示・発問・説明	教授・学習活動	資料	生徒の応答・学習内容
導入	0・学習の視点と学習課題の確認	0. 導入			
		0-1. 人間の行為と社会との関係を、今君たちが着用している制服を例に考えてみよう。君たちの中には、自分なりの解釈にしたがって制服を改造している者もいる。その背景にはメディアの発達によって、都会の流行が情報として全国に発信されていることも影響しているであろう。日本の経済的発展によって、学校での服装に費用をできるだけかけまいとした制服の意義も徐々に失われつつある。また同様に、制服により学校という集団としての秩序を保とうとする意識も、個性尊重という意識の広がりや揺らいでいる。	T. 説明する	1	
		これを資料1の図に従って考えてみると、制服の着用という「行為」は、国民の経済水準や学校制度など社会のしくみ(社会構造)と道徳主義や集団主義など日本的な価値観(文化)に支えられ維持されてきたが、「メディアの発達、安価な衣服の供給、就学率の上昇」などの社会のしくみの変化と「個人主義・個性の尊重」などの価値観の変化が、従来のしくみや価値観と葛藤をおこし、その葛藤のもとでの君たち自身による行為の選択として「制服の改造」が行われていると考えることができる。このように、行為は社会構造や文化に規制されながらも、逆に社会構造や文化を主体的に読み替えたり、変化させたりする場合があるのである。			
		歴史上の事件や出来事も、実は生活者の能動的な行為の選択が、その原因・経過・結果に大きな影響を及ぼしていると考えられよう。今日からしばらく、1692年に北米植民地ニューイングランドのセーラム村で起こった魔女狩り事件を、生活者と行為と社会構造・文化相互関係性という視点から考えていこう。			
		0-2. まず、セーラム村で起こった魔女狩り事件の概要を、確認しておこう。	T. インターネット・サイトを利用して、事件の概要を説明する。	2	1692年に、マサチューセッツ植民地のセーラム村では、数人の少女たちの悪魔憑きの発作と魔女告発をきっかけに、魔女として200人以上が投獄され、うち処刑された者は20人に及んだ。
		0-3. 「セーラム村の魔女狩り事件」を主題に、次の3つの問いを軸に学習を進めていこう。	T. 小単元全体の学習課題を提示する		
		A. ヨーロッパにおいて魔女狩りの犠牲になった人は、数十万とも数百万ともいわれるが、その時期は1600年を中心とする約百年間であった。ヨーロッパで魔女狩りが終わった時期に、なぜ北米植民地で魔女狩りが猛威をふるったのだろうか。			
		B. セーラム村の魔女狩り事件には、これを恥ずべき事件とする見方と、勇気と良心の勝利とみる見方の二つがある。君たちは、どちらの立場でこの事件を評価するか。			
		C. 当時の北米植民地の民衆と魔女狩り事件との関わり方を比較の材料にして、私たちの日常的な生活行為と社会構造や文化との関わり方を検討してみよう。現在の私たちの社会に問題となるような状況があるのだろうか。なぜそれは問題と言えるのか。そうした問題の吟味や解決にむけて私たちはどのような見方や考え方もつ必要があるのか。			

パ ー ト I	1 ・ 生 活 者 の 行 為 と 意 識 の 解 釈 及 び 比 較	A. ヨーロッパで魔女狩りが終わった時期に、なぜ北米植民地では魔女狩りが猛威をふるったのだろうか。 1. セーラム村の魔女狩り事件に関与した主な人々の行為や意識について、気づいたことや疑問に思ったことを指摘しなさい。 1-1. 最初の魔女裁判に関与した人々の行為や意識を、ロールプレイを通じて考えてみよう。 1-2. ティチューバだけがなぜ自分を魔女だと認めたのだろうか。 1-2-1. ティチューバと他の二人の容疑者の異なる点は何か。 1-2-2. ティチューバ固有の条件が、他の二人と異なり、自分が魔女だと認めたことと関係があるのだろうか。 1-3. ベティら少女たちは、確信もないのになぜ魔女の告発を続けたのだろうか。 1-3-1. ベティらは、なぜ村で禁止されているオカルト遊びを続けていたのだろうか。 1-3-2. 少女たちはなぜ魔女告発をはじめたのだろうか。	T. パート I の 課題提示 T. 発問する P. ロールプレイの指示 P. ロールプレイを行う T. 発問する T. 発問する P. 予想する T. 発問する P. 資料を基に答える T. 発問する T. 発問する P. 資料を基に答える T. 発問する P. 資料を基に答える	3 4	<ul style="list-style-type: none"> 裁判の後、オズボーンは獄死、グッドは最後まで罪状を否認し処刑、ティチューバだけは自白と容疑者の告発により、キリスト教の味方に転じたと認定され、処刑を免れた。 ティチューバはカリブ出身の黒人奴隷で、呪術信仰にたけていた。 日頃から差別され、呪術も使い、いかにも魔女に疑われやすいティチューバにとって、自白と告発しか生き延びる術がなかったのではないか。 日頃の単調な生活の中での、好奇心や不満の捌け口として禁じられた遊びに興じたのではないか。 禁じられていたオカルト遊びをしていたことを告発によりカモフラージュできると考えたのではないか。 これまでにない注目されることの快感を味わっていたのではないか。

<第2時>

パ ー ト I	1 ・ 社 会 構 造	1-4. 魔女裁判で村の混乱が続くなか、メーザー牧師は、なぜ徹底した魔女の発見と処罰を主張しているのか。 1-5. ティチューバは自分が魔女だと認めたため、処刑を免れた。魔女を認めれば処刑されずに済むのに、レベッカ・ナスは、自分の裁判でなぜ最後まで否認し続けたのだろうか。 1-6. 陪審員トマス・フィクスは、なぜナスへの無罪評決を覆えたのか。 1-7. 総督ウィリアム・フィップスは、最終的には魔女裁判の中を決定している。総督は、魔女などいないと確信をもって裁判中止を決定したのだろうか。	T. 発問する T. 資料を基に答える T. 発問する P. 資料を基に答える T. 発問する P. 資料を基に答える T. 発問する P. 資料を基に答える	5	<ul style="list-style-type: none"> キリスト教に対する強い信仰心と、北米植民地社会の中核の村であるとの自尊心が作用している。 自分の良心に従った。 神は正しい者を救ってくれると信じた。 被告が魔女だとは思えないが、ここは裁判長に従った方が得策だと考えた。 自分の信条に従ったというよりも、社会的地位や威信のある人の意見を勘案したり、社会的情勢を見極めながら、裁判中止を決定している。
		2. 事件が起こった17世紀末のマサチューセッツ植民地社会はどのような特質をもつ社会だったのか。 2-1. 北米の英領植民地の特色を考えてみよう。まず移住の動機は何だろう。1620年の事件を思い出してみよう。 2-2. 北米のフランス植民地の場合、毛皮取引を目的とする一時的な居住であった。これに対して、イギリス植民地の産業・居住形態はどのようなものだろう。世界史資料集『新詳世界史図説』浜島書店、p.130. 図表2「イギリスの北米植民地」を参考に答えなさい。 2-3. マサチューセッツは1691年にプリマスを併合しているが、この時期まで併合が遅れたのは宗教的理由からである。プリマスの宗教的特色とは何か。世界史資料集図表3「アメリカ植民地の成立」を参考に答えなさい。 2-4. マサチューセッツにおける自治制度はどのようなものだろうか。南部のカウンティ制度と比較してみよう。世界史資料集図表2を参考に答えなさい。	T. 発問する T. 発問する P. 答える T. 発問する P. 資料集を基に答える T. 発問する P. 資料集を基に答える T. 発問する P. 資料集を基に答える	年表 資料集の図表 資料集の図表 資料集の図表	<ul style="list-style-type: none"> 宗教的自由を得るため。 自営農民として家族単位で移住し、定住する者が多かった。 ピューリタンの分離派に属する。北米に移住したピューリタンには、移住後もイギリス国教会から離脱しない人々（会衆派）と離脱した人々（分離派）とがいたが、マサチューセッツの場合は会衆派が中心であった。 教会を中心とする直接民主政方式による寄り合い制度であった。

と文化の連関パターン分析	<p>2-4. マサチューセッツにおける自治制度はどのようなものだろうか。南部のカウンティ制度と比較してみよう。世界史資料集図表2を参考に答えなさい。</p> <p>2-5. アメリカ最古の大学であるハーバード大学が設立された目的は何か。それは何を意味しているか。</p> <p>2-6. 魔女として告発された人も、告発した人もすべて女性である。このことは植民地社会における女性の地位や立場について何を意味しているか。</p> <p>2-7. セーラム事件が起こった1692年頃、新大陸ではどのような事件が起こっているのだろうか。</p> <p>2-8. 英領植民地の民衆にとって、フランス軍以上の脅威があった。自営農民が多かったこととも関係があるが、それは何だろうか。</p> <p>2-9. インディアン・フランス軍の襲撃以外にも、大航海時代にスペイン人が新大陸に持ち込んだ伝染病も流行していた。その伝染病とは何だろうか。世界史資料集p.111の図表2「アメリカ大陸にもたらされたもの」を参考に答えなさい。</p> <p>2-10. 世界史資料集p.130 図表3をもう一度みてみよう。1636年にロードアイランド植民地を設立したロジャー・ウィリアムスはクエーカー教徒にも信仰の自由を与えるべきだと主張したことによりマサチューセッツ植民地から追放され、ロードアイランド植民地を建設した。この出来事から、マサチューセッツ植民地の宗教的雰囲気としてどのようなことが考えられるか。</p>	<p>T. 説明する T. 発問する P. 答える T. 発問する P. 資料集を基に答える T. 発問する P. 年表を基に答える T. 発問する P. 予想して答える T. 発問する P. 資料集を基に答える T. 資料集を基に説明する T. 発問する P. 予想して答える</p>	<p>4</p> <p>年表</p> <p>資料集の図表</p> <p>資料集の図表</p> <ul style="list-style-type: none"> ・牧師の教育を目的に設立された。 ・北米植民地においては、キリスト教信仰が極めて重要視されていた。 ・男性中心の社会で、女性の立場が弱かった。 ・フランスとの植民地戦争であるウィリアム王戦争(1689~97)が起こっている。 ・先住民のインディアンが土地を奪われた恨みから、フランスに味方してイギリス領を襲っていた。 ・天然痘 ・マサチューセッツ植民地は、キリスト教信仰が重きをなしていた地域であり、自分たちの信仰・教条から逸脱している者を許さないという、宗教的に不寛容な地域であった。
--------------	---	---	--

<第3時>

4・行為を産み出した社会構造・文化の条件解説	<p>3. ヨーロッパで魔女狩りが終わった時期に、なぜ北米植民地では魔女狩りが猛威を振ったのだろうか。</p> <p>3-1. 17世紀末のマサチューセッツ植民地の社会構造と文化の特徴をどのように整理することができるだろうか。資料1のモデル図を参考にしまとめてみよう。</p> <p>3-2. マサチューセッツ植民地社会の社会構造と文化の特質に照らして、事件に関与した人々の行為の意味を改めて考えてみよう。それぞれの行為の意味には、共通点があるだろうか。また、相違点があるだろうか。そのような共通点や相違点を見出したあなたの根拠は何か。</p> <p>3-2. 最初の問いに戻ろう。ヨーロッパで魔女狩りが終わった時期に、なぜ北米植民地では魔女狩りが猛威を振ったのだろうか。</p>	<p>T. 発問する T. 発問する P. モデル図を活用して答える T. 発問する P. 答える T. 発問する P. 答える</p>	<p>1</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(社会構造) 教会を中心とした自治、自営農民が多数を占める社会構成、男性中心の社会 ・(文化) キリスト教信仰の重視とそれに基づく宗教的不寛容さ ・魔女告発をしたベティら少女たち、自白したティチューバは、立場こそ違え村では社会的弱者であった。彼らは、告発や自白という方法により、日頃の不満や不安に対するストレスの捌け口や自己主張の場を得ていたと思われる。 ・メーザーとナースは、事件における立場は異なるが、彼らは植民地社会の秩序やキリスト教信仰に、自己の行為の規範をぶれることなく置いている。 ・スタウトン、フィスク、フィップスは、魔女裁判を司る責任ある立場にありながら、植民地社会における立場や権力関係と自己の信念との間で葛藤し、行為の決定が揺らいでいる。 ○植民地社会は、教会中心、白人男性中心といった硬直した内部構造を持っていた上に、外的には食料難、伝染病流行、継続する戦争など不安要因を抱えていた。そうした中で、民衆は、不満の捌け口や自己主張の機会を求めていたと考えられる。魔女告発の連鎖は、そうした共同体のストレスの受け皿となり拡大していった。民衆は、魔女裁判の結果を全面的には受け入れていなかったが、社会的地位の高い人が言ったことには従っておこうという考えが、魔女狩りをさらに拡大させた。
------------------------	--	--	---

パートII	<p>4・行為に対する評価及び再構成</p> <p>B. セーラム村の魔女狩り事件には、これを恥ずべき事件とする見方と、勇気と良心の勝利とする見方の二つがある。君たちは、どちらの立場でこの事件を評価するか。</p> <p>4-1. 「恥ずべき事件」と評価する人は、その理由を述べなさい。</p> <p>4-2. 「勇気と良心の勝利」と評価する人は、その理由を述べなさい。</p>	<p>T. パートIIの課題提示</p> <p>T. 発問する P. 討論する</p> <p>T. 発問する P. 討論する</p>	<p>○この事件では、村全体が精神的な混乱状態に陥り、一部の権力者や狂信者の言動に、本来は理性的であるはずの多くの人々がからめ取られ、適切な判断力を失ってしまっていた。そして、社会的弱者や共同体の中で異質な者とみなされた人に、魔女の嫌疑が多くかけられた。この事件は、まさに人間の弱さをさらけだしているように思う。</p> <p>○住民自身が自らの手で事件を終息に導いたのであり、裁判所は自らの過ちを認め、被害者に損害賠償まで行っている。人間は自らの手で理性を取り戻すことが出来ることを示したのである。人間に理性と良心を信頼したい。</p>
-------	---	--	---

<第4時>

パートIII	<p>5・自己の行為の再方向づけ</p> <p>C. 当時の北米植民地の民衆と魔女狩りとの関わり方を比較の材料にして、私たちの日常生活行為と社会構造や文化との関わり方を検討してみよう。現在の私たちの社会に問題となるような状況はないのだろうか。なぜそれは問題と言えるのか。問題だとするならば、そうした問題の吟味や解決にむけて私たちは社会に対するどのような見方や考え方をもち必要があるのか。</p> <p>5-1. セーラム村の魔女狩り事件が示している問題と類似した問題が、私たちの社会にもあるか。問題点はどこにあるのか。</p> <p>5-2. そうした問題の吟味や解決にむけて、私たちは社会に対するどのような見方や考え方をもち必要があるのか。</p>	<p>T. パートIIIの課題提示</p> <p>T. 発問する P. 討論する</p> <p>T. 発問する P. 討論する</p>	<p>(予想される問題の例示)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2001年7月の参議院議員選挙の時みられた国民の政治的態度と政治意識。小泉内閣が掲げる「構造改革論」は、日本の既存の政治・経済のしくみや平等主義・集団主義など日本の価値観に根本的な変更を迫る可能性も持ってるにもかかわらず、政策議論が十分になされないまま、首相の個人的人気に依在した選挙運動や投票行動がみられたこと。 ・最近、各種の占いや新興宗教が流行しそれをめぐるトラブルが多発している。そこには、社会情勢の不安定な中、多くの人が自分に自信が持てず、ついメディアからの情報や集団意識に促されて無批判に信仰に走ってる現状があるのではないか。 <p>○自分の行為を規制している社会のしくみ(社会構造)と社会的価値(文化)を批判的に吟味していくこと。</p> <p>○自分の行為選択の仕方と行為の中身を批判的に吟味していくこと。</p>
--------	---	---	---

(学習資料)

1. 本稿理論編図1「生活者の行為と社会の関係モデル」を使用する。
2. インターネットサイト：Salem Witch Museum (<http://www.salemwitchmuseum.com>)
3. ロールプレイ用資料
 - ① 場面：マサチューセッツ州セーラム村の教会での最初の魔女裁判予備審問
 - ② 年月日：1692年3月1日(火)
 - ③ 登場人物

立場	氏名	人物の概要
判事	ジョン・ホーン	地方集会の議員で、法律専門家ではない。
被告	ティチューバ	バルバドス出身の女奴隷。使っているパリス牧師の娘ベティら少女たちに、黒魔術を指南していた。
被告	セアラ・オズボーン	裕福な女性だが、一年以上教会に行っていない。夫の死の直後に使用人と再婚。
被告	セアラ・グッド	貧しい物乞い。6歳の子の母で、妊娠中。
原告兼証人	ベティ・パリス	9歳の女子。父は牧師で、ティチューバの主人。仲間の少女たちと、密かにオカルト遊びに興じていた。
原告兼証人	アビゲイル・ウィリアムズ	ベティと同居する従姉。
原告兼証人	5～6名の少女	ベティ、アビゲイルと共に被告3人を魔女と証言。

④ 脚本

判事：誰がお前を苦しめたのか。

ベティ：父や聖職者たちから「あなたたちを苦しめている者の名をあげてくれ」と頼まれても、最初は思い出しようがありませんでした。誰が自分たちを悩ませたのでもない。ただそれが起こったというだけだったのです。でも、よく考えてみると、それは、ティチューバとセアラ・グッド、それにセアラ・オズボーンです。

判事：お前は子どもたちを苦しめたことがあるか。

グッド：ばかばかしい話だよ。

判事：お前は物乞いのとときかぶつぶつ言いながら家々を回るようだが、いったい何を言っているのか。

グッド：あんたにそれを言わなきゃならないのなら、言うよ。それは私の戒律さ。

判事：セアラ・オズボーンをここへ。

グッド：オズボーンばあさんだよ。子どもたちをいじめているのは。

判事：お前は魔女か。

オズボーン：魔女どころではなく、自分が妖術をかけられたみたいです。インディアンのような真っ黒いものが、私の首をつねり、頭の後部をつかんで引っ張り、家のドアのところまで連れていきました。

判事：ティチューバをここへ。子どもたちが言っていることは本当か。

ティチューバ：本当です。悪魔の「かたち(生霊)」が、私に子どもたちをつねれと命じたのです。

(ロールプレイ用資料は、マリオン・L・スターキー(市場泰男訳)『少女たちの魔女狩り—マサチューセッツの冤罪事件—』平凡社, 1994, pp.52~68. より筆者作成。)

4. 文字資料

女たちも怠けてはいなかったが、その仕事はずっと昔からおなじみの単調なきまりきった仕事の繰り返しだった。時にはいつもと違った仕事やってくるのがあったが、それは主に夏で、野に出て野イチゴをなどの実をつむときや、林や畑で働いている男たちにビールを届けるときなどだった。冬にはそういうわずかな気晴らしもすべて絶たれた。なかには安息日の集会のとき以外、家の外にはほとんど一歩も外に出ない人もいた。

既婚婦人にはこの単調さも馴れっこになっていた。足手まといになるごく小さい子どもがいる人は、忙し気で気が紛れた。しかし、まだ縁談もかかってこない若い娘にとっては、冬は救いのない単調な苦行だった。といっても彼女たちからみれば、結婚すればロマンチックな生活が送れるとは必ずしも思えなかった。娘たちが暮らしている精力旺盛な社会では、既婚婦人はまるで牝牛のようにしょっちゅう妊娠するのがみられたし、出産のつらさもよくわかった。しかしたとえそうだとしても、結婚か、それのほっきりわかる見通しがなくては、将来の方向がまるで検討がつかなかったし、おまけにそれ以上に悪いことに、一人前に扱ってもらえなかった。彼女たちには居場所も地位もなかった。ひとりよがりの既婚婦人や寡婦のいうまま、なすがままに暮らすほかに、なかにはそういう既婚婦人や寡婦をひどく恨んでいる者もいた。

(スターキー, 前掲書, p.28. より引用。)

5. 文字資料

人物	立場	主張・状況認識
コットン・メーザー	イエール大学設立者で、牧師。種痘の推進者。悪魔の存在を信じ、魔女狩りを奨励。	ニュー・イングランド人は、かつて悪魔の領土であったところに住み着いた神の民である。悪魔は、これらの人々がイエスに対してなされた約束を達成しようとしているのに気づきおおいに困惑しているであろう。・・・こうして悪魔は怒りだし、この貧しい植民地をくつがえそうとしてあらゆる手段をこころみだ。・・・いまわれわれはそういう恐ろしい企てを見いだしている。一軍の悪魔がセーラムに襲いかかっている。セーラムの土地こそ、わがイングランドの植民地の中心であり、いわばその最初のものなのだ。
レベッカ・ナース	71歳の女性。魔女と告発され、裁判にかけられた(1692年7月処刑)。	魔女だと認めれば、死なずに済むのは分かっている。しかし私は永遠の父の前で自分は無実だと言うことができます。そして神様は私の無実を明らかにしてくださるでしょう。
ウィリアム・スタウトン	レベッカ・ナース裁判の裁判長。ハーバード大学とオクスフォード大学で学んだ。	(陪審団の無罪評決に対し) 私は陪審に口をはさむつもりはない。しかし自白した魔女の一人デリヴァランス・ホプスが、レベッカ・ナースを見て、「おや、あの人を連れてきたの？あの方は私たちの仲間なのに。」と言った。陪審員たちがこの言明の含む意味を考慮して無罪評決を下したかは疑問だ。
トマス・フィスク	レベッカ・ナース裁判の陪審員長。	無罪評決を出したものの、自分たちより学識も経験も豊かな裁判長が、被告を魔女だと確信しているようなので、評決を「有罪」と変更しよう。
ウィリアム・フィップス	マサチューセッツ州総督	レベッカ・ナースの子どもたちの主張は十分納得のいくものだったので、死刑執行延期にサインした。しかし、この延期にクレームをつけてきた人の中には、無視できないマサチューセッツのお偉方もいたので、死刑を再度認めるしかなかったのだ。だが、ニューヨークの聖職者たちは、マサチューセッツの魔女裁判に疑問を呈している。また、魔女裁判が原因で、人心は荒廃し、経済も停滞している。これ以上の魔女裁判は禁止しなければならない。

(スターキー, 前掲書及び浜林正夫, 井上正美『魔女狩り』教育社, 1983, を参考に筆者作成。)

2. 授業展開の論理

高等学校の世界史の授業において、17世紀後半～18世紀前半の北米植民地をめぐる問題は、これまで植民地戦争を軸として展開されてきた。しかし英領植民地には軍隊は駐留しておらず、戦いの中心となったのは入植者によって組織された民兵であった。この意味で英領植民地の社会構造に関する認識形成において当地における「生活者」の在り方を無視することはできないと思われる。また英領植民地の特色として、その設立の背景が宗教的理由であり、移住を目的とした家族単位での植民であったことが、後の先住民からの土地の収奪という問題にもつながった。以上のことから、北米における英領植民地社会を、生活者の立場から理解することが重要であると考え、本単元を構想した。事例に選択したのは、1692年にマサチューセッツで発生した魔女狩り事件である。事例の選択にあたっては、本事件が、当時の北米植民地の社会構造（政治や経済、社会集団関係）と文化（宗教的意識や価値観）を反映した事件であり、民衆の日常的な行為と社会との関わりをよく示していると考えたことがひとつの基準となった。また、この事例が、社会構造に内在する不平等、差別意識など「課題の現在性」を内包していることも選択の基準となった。

本小単元は、大きく三つのパートから構成されている。パートⅠは、主要発問Aに基づき、「植民地戦争期における民衆の行為と社会の関係認識」（事実認識）の過程であり、パートⅡは主要発問Bに基づき「魔女狩りに関与した人々の行為に対する評価基準の再構成」（価値認識）の過程とした。そしてパートⅢが主要発問Cに基づき「現在を生きる生活者としての自己の行為の反省的吟味と再方向づけ」（価値認識）の過程である。

パートⅠでは、まず魔女狩りの端緒となった人物についての意識・価値観を究明し、それに基づく行為を解釈する。その際、意識・価値観を心情的に理解できるようロールプレイを用いた。そして、マサチューセッツの民衆が魔女狩りに対して示した複数の行為を比較する。学習対象となる行為者の選択の基準としては、魔女狩りに対する関わり方の立場性と差異性を考慮した。当該社会の

中で弱者の立場にありながら、事件においては、植民地社会の権力関係をうまく利用して自己の立場を守った人物群としてティチューバとベティら少女たちを選び、植民地社会のしくみや規範に自己の行為を明確に一致させている人物群としてメーザーとナースを選んだ。また、植民地社会の権力関係と自己の意志との間で行為に迷い、葛藤が現れている人物群としてスタウトン、フィスク、フィップスを選んだ。そして17世紀末のニューイングランド植民地、なかでもマサチューセッツの置かれていた政治的・経済的・社会的状況の探求を通じて、これらの行為が生み出された条件を、社会構造・文化との連関において把握する。以上をふまえた上で、当時のマサチューセッツの人々の生活行為（疑問を感じながらも、社会的評価の高い人物を信用してしまったこと）が、結果として魔女狩りを激化させてしまったことの問題性を認識する展開となっている。

パートⅡでは、現在セーラム事件に対してなされている相反する二つの評価を紹介し、魔女狩りに関わった人々の行為に対する評価とその基準を形成する。そして他者の意見を聞くことで、自己の評価を再構成することを目指した。この事件についての評価は、オープンエンドとする。

以上の学習を踏まえパートⅢでは、魔女狩りを容認してしまったマサチューセッツ植民地の民衆の、当時の行為や意識のあり様と同じ論理で説明できる現在の我々の行為や意識のあり方をめぐる問題を取り上げる。そして、それらの問題の解決を指向しての社会の見方・考え方を、生徒同士の討論を通じて探っていくという展開をとる。5-1の学習では、例えば、2001年7月の参議院議員選挙にみられた、「構造改革」をめぐる政策議論抜きの、ややもすると政治家の個人的人気に促された国民の政治的態度決定の在り方や、最近の各種占いや新興宗教の流行とその無批判な受容をめぐる問題などを取り上げることができよう。前者は政治問題、後者は社会生活問題で、問題の位相は異なるが、政治混乱や経済不況のなか、日本の既存の社会システムや平等主義・集団主義といった日本的価値観が揺らいでいる状況下で、一元的価値を主張する言説や態度に対する批判力が失われ

ていっている現状を象徴しているように思われる。こうした問題状況を克服するため、生徒たちには自己の行為及びそれを規制する社会構造や社会的価値（文化）を批判的に吟味していくことの必要性を認識してもらいたい。

IV 特質と限界—おわりにかえて—

本歴史学習論は、日常生活世界とそこで展開する生活者の行為を媒介に、子どもに、過去社会の認識と現在社会の認識とを接続させ、現在を生きる自己の状況における行為選択に関する反省的吟味の必要性をメタ認知レベルでつかませることを特質としている。本学習論を通じて子どもに形成をめざす歴史認識内容の中核は、①個の日常生活に内在する政治・経済・社会・文化にわたる構造的契機の認識、②状況における個の行為決定の主体性の認識、③個別の価値判断や行為選択のせめぎあいを通じて特定の歴史事象が生起していく歴史の動態認識、の3つである。こうした歴史認識内容と市民的資質としての「行為のメタ認知能力」を育成していくための学習方法の原理的特質は、「行為の解釈」「社会構造の分析」「行為の反省と新たな行為基準の生成のための討論」を有機的に結合させているところにある。

こうした特質は、「行為の解釈」、「社会構造の分析」をそれぞれ原理とする歴史学習論の相互批判の観点を克服するものにもなっていよう。

しかし、本学習論は、生活者の行為の内在的理解を不可欠の要素としているため、学習対象を比較的短期の、空間的にも限定された歴史事象に求めていくことになる。そのため、行為を条件づけるマクロな社会構造の把握は、限定された時・空間でなされていくので、いきおい中・長期的な時間幅での「社会構造の形成と変容の過程」の把握は弱くなるという限界をもっている。

本学習論は、行為・社会構造・文化の相関関係に関する抽象度の高い歴史認識を要求することから、その適用は中等教育により適しているといえよう。その特質と限界を踏まえ、現行の中等歴史教育課程に応用していく方法を考慮すれば、時代構造の解釈をめざす日本史・世界史の一般史学習に、本学習論に基づく主題学習を統合していく方

法が、子どものトータルな歴史認識形成を考えたときには生産的であろうと考える。

[註]

- 1) 安井俊夫『子どもと学ぶ歴史の授業』地歴社、1977、を参照のこと。
- 2) 森分孝治『社会科授業構成の理論と方法』明治図書、1978、を参照のこと。
- 3) 原田智仁『世界史教育内容開発研究—理論批判学習—』風間書房、2000、を参照のこと。
- 4) 「生活者」の概念規定にあたっては、次の文献を参考にした。
 - ・天野正子『「生活者」とはだれか—自立的市民像の系譜—』中公新書、1996。
- 5) 行為と社会を「変化していく相互関係」において捉える社会認識論については、次の文献に学んだ。
 - ・アンソニー・ギデンズ（友枝敏雄、今田高俊、森重雄訳）『社会理論の最前線』ハーベスト社、1989。
- 6) 本稿は、既発表の次の論稿の続編にあたる。
 - ・梅津正美「状況における行為の反省過程としての歴史授業構成—高校地歴科世界史B小単元「ナチス支配体制下の民衆生活」の開発を事例として—」社会系教科教育学会編『社会系教科教育学研究』9号、1997、pp.1-11。前稿に対する本稿の位置と意義は、次の3点にある。第1に、「社会科歴史学習」に位置づく他の学習論に対して、「行為の反省」を原理とする歴史学習論の位相を、社会認識論を視点に明らかにしたこと。第2に、学習過程論と学習方法論を中心に授業構成論を精緻化したこと。第3に、前稿で研究課題として示した「移民史におけるマイノリティと文化変容」を視点とする歴史単元の開発を実際に行ったこと。